



Title	一切経音義全文データベース構築による平安時代古辞書についての実証的研究 [全文の要約]
Author(s)	李, 乃琦
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12958号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/70226
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Naiqi_Li_summary.pdf



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 李 乃琦

学位論文題名

一切経音義全文データベース構築による平安時代古辞書についての実証的研究

辞書は、言葉を集めるものである。言葉を解釈するために、語の起源から始まり、現在の意義まで説明する必要がある。そのため、辞書の編纂に際して、ゼロからではなく、多数の文献を参考したことが容易に想像できる。

日本の辞書編纂史は平安時代から始まり、今でも続いている。辞書編纂の萌芽時代である平安期では、参照が可能である資料が限られていた。それらの資料では、中国からもたらされた文献が少なくない。そのため、日本辞書の源流を遡る際に、中国文献の検証を避けることはできない。

それにより、本研究は中国文献の利用という視点から、日本古辞書についての考察を試みる。古辞書といえば、平安時代漢和辞書の双璧として広く知られているのは『新撰字鏡』と『類聚名義抄』である。『新撰字鏡』は現存する日本最古の漢和辞書であり、最初に『一切経音義』を利用する利便性を目指して成立したものである。その後編纂された『類聚名義抄』は平安時代の音義書を集大成するものであり、130 種以上の出典が明記され、多数の文献を利用したことが窺える。その中で引用数が最も多いのが『一切経音義』である。よって、この両者の共通点として、最初に注目すべき点は『一切経音義』の利用である。

なぜ『一切経音義』は日本で辞書編纂の根幹資料として使われていたのか。それは、『一切経音義』の成立背景と網羅的内容とが深く関わっている。唐代に玄奘がインドから大量の仏典をもたらした。7 世紀の僧侶である玄奘は玄奘の「訳場」で仏典を翻訳する際に、その中に難字難語が大量に存することから、それらについて解釈するため、『一切経音義』を編纂した。『一切経音義』は中国に現存する最古の仏典音義であり、当時の「仏学大辞書」とも言える。また、『一切経音義』は 450 部以上の仏典に対して、10,000

近くの項目を収録している。それらの言葉を解釈するために、仏典のみならず、『爾雅』・『説文解字』など大量の漢籍を引用した。仏典音義とえば、梵語の訳語を収録するのは当然であるが、『一切経音義』では、当時の言語状態・発音にのみならず、方言まで詳しく説明した。現時点でも、『一切経音義』は仏典音義という役割のみならず、唐代の「言語大辞書」という側面も十分あり得る。当時、翻訳された仏典の伝播に伴い、一切経音義も広く伝わった。現在残されている一切経音義は版本と写本の二種類である。版本においては、中国の磧砂蔵、金蔵などがあり、写本においては、日本の古写本とイギリス・フランス・ドイツ・ロシアの敦煌・吐魯蕃断片群が存する。それらのうち、中国の版本と日本の写本とが異なる系統に依拠して成立したということはほぼ定説になった。

このことから、奈良時代に仏典が日本に伝来する際にも『一切経音義』は仏典を解説するための優れた「辞書」として、日本に伝わってきたことが窺える。現在残されている『一切経音義』写本が10種以上あることから、当時各地の寺院で頻繁に勉強・書写されたことも窺える。

膨大な言語情報を持つ『一切経音義』が日本に伝来した後、どのように利用されたのか。特に、日本古辞書の編纂にどのような影響を与えたのかを解明することを本研究の目的とする。そのため、平安時代の代表的な古辞書である『新撰字鏡』、『類聚名義抄』と現存する最古の仏典音義の『一切経音義』を比較して、日本辞書編纂史における中国文献の享受の実態を考察する。

研究意義

『一切経音義』は中国で編纂された書物であるが、現在中国では版本の『一切経音義』しか残されていない。それに対して、日本では、10種以上の写本が現存している。これまで、『一切経音義』の版本については、中国語学・仏教学の視点から十分研究されてきたが、日本にのみ現存する古写本については十分な研究が未だなされていない状況である。

一方、『一切経音義』は平安時代古辞書である『新撰字鏡』と『類聚名義抄』が編纂された時に、基幹資料として使われたことから、国語学研究においても貴重な資料である。にもかかわらず、両者の関係については研究が不十分だと言わざるをえない。その

理由は、日本に現存する平安時代以来の『一切経音義』古写本に、少なくとも二つの系統が想定され、「日本古辞書がどの系統の一切経音義を引いたのか」がそもそも解明されていないためである。

2006年に5種の『一切経音義』古写本が公開されてから、10年も経った。しかしながら、日本古辞書が利用した『一切経音義』の系統についてはいまだに明らかにされていない。それは、『一切経音義』古写本が、その膨大さゆえに、全面的には利用されていないためである。それらの研究空白を埋めるために、筆者は9種の『一切経音義』古写本を全て電子テキスト化し、「一切経音義全文データベース」を構築した。それにより、それら写本の系統分類が判明し、増訂・省略・改編・併合なども確認できるようになった。また、日本の古辞書と照合させることで、その編纂方針も明らかとなり、ひいては日本古辞書編纂史の再検討にもつながると考えられる。特に日本古辞書と中国仏典音義との関係に迫るという点は、国語学・中国語学に対して独創的な点だと言える。

論文構成

本論では、「一切経音義全文データベース」の構築に基づき、『一切経音義』古写本と平安時代古辞書についての研究を試みた。第一部の研究篇と第二部の資料篇からなる。

第一部の各章における検討内容は次のとおりである。

第1章では、まず『一切経音義』写本と版本についての研究成果をまとめた。次に、日本平安時代古辞書の代表としての『類聚名義抄』と『新撰字鏡』について、成書の経緯・構成・現存本などについて紹介、さらに、両者の共通出典としての『一切経音義』との関係についての研究成果まとめた。そのため、本論の研究対象を『一切経音義』日本古写本、図書寮本『類聚名義抄』、天治本『新撰字鏡』とした。一方、図書寮本『類聚名義抄』は漢文注を重視し、出典を明記する編纂方針であり、天治本『新撰字鏡』は各文献を混同する構成であり、両者に行う研究は各自の性質に合わせて、別々に定めた。

第2章では、現存する『一切経音義』古写本について紹介し、さらに「一切経音義全文データベース」の構築時に利用する資料を紹介した。『一切経音義』の構成により、経目名と本文との系統分類を各自に試みた。その結果、『一切経音義』日本古写本を三つの系統に分けた。すなわち、高麗本系統【高麗本、七寺本A（巻第一～巻第十、巻第十三、

卷第十四)】、大治本系統【大治本、金剛寺本、七寺本B(卷第十二、卷第十五(東大本)卷第十六～卷第十八、卷第二十一、卷第二十三～卷第二十五)】、石山寺本系統【石山寺旧蔵本(広大本、京大本、天理本卷第九)、天理本卷第十八、西方寺本】である。一方、七寺本は各巻によって系統が異なり、七寺本の書写形式と合わせて検討した結果、七寺本が取り合わせ本であることを解明した。

第3章では、既に分類した『一切経音義』日本古写本の各系統を『類聚名義抄』と照合し、異文の内容について分析した上で、各系統の独自異文が類聚名義抄に見られることがわかった。各系統と『類聚名義抄』との対応する項目数とその中の不一致する項目数を統計した。その中、不一致率の順が高麗本系統>石山寺本系統>大治本系統である。これによって、『類聚名義抄』が編纂された時、利用された『一切経音義』は大治本系統に最も近いことがわかった。

第4章では、『一切経音義』と『新撰字鏡』との照合を行った。『新撰字鏡』注文の出典が明記されていないため、『一切経音義』の独自注文がある独自項目を取り上げて比較した。その結果を再び確かめるために、部分的に共通項目の独自注文との照合を試みた。その結果、『新撰字鏡』の依拠本は高麗本系統に近いことがわかった。それにより、『新撰字鏡』の成立背景について、三つの仮説を出した。

第5章では、同じ写本である『一切経音義』の敦煌・吐魯蕃断片群に着目した。それらについての先行研究と現存する断片群の目録をまとめた上で、研究対象を決めた。それは、断片群の中で、項目数が最も多いP.2901と、前後の書写形式が異なるφ230である。そのあと、両者を別々に『一切経音義』日本古写本との比較を行った。それにより、両者の編纂方針と独自性が明らかになった。

第二部の各章における検討内容は次のとおりである。

第1章では、「一切経音義全文データベース」の構築方法を検討した。

第2章では、『一切経音義』諸本で残巻数が最も多い巻第九を例として、データベースの構築方法を説明し、問題となる項目のみを抽出し、データベースの形式を示した。

第3章では、『類聚名義抄』(図書寮本)の「玉」部を例として、『類聚名義抄』における『一切経音義』からの引文を示すものである。